

## コラム 63ー 昭和天皇とユダヤ人の救出

### <樋口季一郎陸軍少将によるユダヤ人救出劇>

1938（昭和13）年3月8日、満州との国境、シベリア鉄道の終点となるオトポール駅で、ドイツを追われた約5千人（一説には2万人）のユダヤ人が、飢えと寒さで死に瀕していました。彼らは、満州国を経由して、上海へ脱出しようとして、オトポール駅までたどりついたのですが、満州国外務部が難民の受け入れを躊躇していたのです。そのとき、ハルビン特務機関長の樋口季一郎陸軍少将（写真）は、直ちに難民の通過ビザの発行を決め、救援列車を出動させて、難民の救助にあたりました。



樋口季一郎陸軍少将

凍死者は10数人、あと少し遅れたら、その被害はもっと増えていました。樋口の迅速な決断が、多くのユダヤ人たちの命を救いました。この樋口の迅速な決断を生ぜしめたのは、満州在住・ユダヤ人代表のカウフマン博士らの懇請もさることながら、樋口が以前、ロシアを旅行中に会ったユダヤ人の「私は日本の天皇陛下こそ、私たちの待望する救世主ではないかと思っています。なぜなら日本人ほど人種偏見のない民族はなく、日本の天皇はその国内で、階級的になんらの偏見を持たないと聞いています」という言葉が脳裏を横切ったからだったのです。

この救出劇に対して、ドイツから猛烈な抗議がきましたが、これに対し樋口は次のように述べています。「ドイツの国策が、追放したユダヤ人を困窮させることが目的ならば、それは人道上の敵である。日本と満州の両国が、非人道的なドイツの国策に協力するならば、それは人倫の道にそむくものである。私は日本とドイツの友好は希望するが、日本はドイツの属国ではなく、満州もまた日本の属国ではないと信じている。」と。この話を聞いていた関東軍参謀長である東條英機は「よくわかった。この件は不問に付すように伝えておく」と力強くうなずいたといわれます。

戦後、ユダヤ民族の幸福に、力を貸してくれた人々の恩を永久に忘れてはならないと、エルサレムの丘に「黄金の碑」が建立されました。この碑の上から4番目に、「偉大なる人道主義者、ゼネラル・樋口」と刻まれています。

## <日本のユダヤ人対策>

1938(昭和13)年12月6日、陸軍大臣・板垣征四郎(写真)が、5相会議(首相、外相、蔵相、陸相、海相)で次のような「ユダヤ人対策要綱」を提案し、了承決定されます。

「ドイツ・イタリア両国との同盟関係を保持するのは日本外交の要であり、同盟国が排斥しているユダヤ人を積極的に日本に抱えることは原則として避けるべきではあるが、ドイツと同様に極端に排斥することは、日本が長年主張してきた人種平等の精神に合致しない」とし、日本政府の方針としては、次のように定められます。

- 1 現在、日本・満州・中国で生活しているユダヤ人に対しては、他国人と同様に公正に取り扱い、排斥するような行動は執ってはならない。
- 2 新たに日本・満州・中国にやってくるユダヤ人に対しては、一般の外国人の入国と同じように扱い、公正に処置をすること」

この日本政府のユダヤ人に対する方針については、特に、陸軍随一のユダヤ問題研究家・安江仙弘(のりひろ)陸軍大佐(写真)が関わっています。安江大佐は、陸軍大臣・板垣征四郎に対して、次のような進言を行います。「ユダヤ人は従来第三者のごとき地位であったが、支那事変とともに我々の軒先に入ってきたのである。これをいかに扱うか。ドイツのごとき方法を取るべからざることは明瞭である。日本の八紘一宇(全世界が一つ屋根の下で仲良く暮らすこと)、満州の諸民族協和の精神からしても排撃方針は不可である。よろしく保護し、御陵威(みいつ)(皇室の民を守る威光)を彼らにおよぼすべきである。」

板垣陸軍大臣はこの進言を受け入れて、「ユダヤ人対策要綱」をまとめたのです。

さらに、安江大佐は、ユダヤ人の中心人物であるカウフマン博士と協力して満州における5万人にもおよぶユダヤ人が助けられました。戦後、安江大佐の名前も樋口少将とともに、エルサレムの丘の「黄金の碑」に刻まれています。

## <上海における犬塚機関>

陸軍でのユダヤ問題の第一人者が安江大佐であったのに対し、海軍の第一人者は犬塚惟重(これしげ)海軍大佐(写真)でありました。犬塚は1939(昭和14)年から1942(昭和17)年までの3年間で、上海で犬塚機関をつくって、ユダヤ問題の解決に尽力しました。上海では、海からユダヤ難民が訪れ、日本租界地だけで1万8000人、上海全体で約3万人のユダヤ人が住んでいました。犬塚は上海での着任期間中に、ユダヤ難民のた



板垣征四郎  
陸軍大将



安江仙弘  
陸軍大佐



犬塚惟重  
海軍大佐

めの収容施設や、病院・学校などをつくり、その生活に便宜を図りました。

犬塚には、上海での着任中に人事局から「少将への昇進の過程として、一時、海上勤務にまわるように」という内意がもたらされたが、自分がユダヤ問題を担当することが、日本にとってもユダヤ人にとっても良い、との判断から、栄達の道を投げ打ち、上海勤務継続を願い出たのです。

さらに、犬塚大佐の功績でもっとも大きいのは、ミール神学校のユダヤ教の教師(ラビ)と神学生ら350名をアメリカに渡るために救済したことです。

ユダヤ人にとって、宗教指導者であるラビと神学生を守ることは非常に大事なことであり、これらの学生は将来、ユダヤ人の指導者として大きな影響を与えることができるからです。この犬塚の功績は、戦後もユダヤ教会から永く感謝されています。

日本はドイツと三国同盟を結んでいたにもかかわらず、多くのユダヤ人を救済していたのです。陸軍も海軍も一致してユダヤ人を救済したのは、日本の従来からの基本方針である「人種差別反対」の精神が一貫して貫かれていたからであります。

後年、犬塚大佐はユダヤ人から「ユダヤの恩人」として、ゴールドンブックに記名したいという依頼を受けますが、このとき、「記名されるべきは天皇陛下であられる。私は陛下の大御心を体して尽くしているだけである」と述べて断っております。

前述した樋口少将にしても、ユダヤ人が天皇陛下を「救世主」と呼んでいたことを思い出し、救出活動に尽力したのです。

#### <命のビザを書いた杉原千畝>

外交官では、リトアニアの領事代理だった杉原千畝(ちうね)

(写真)が多くのユダヤ人に「命のビザ」を発行しています。

1940年7月、ソ連はバルト三国を支配下に置き、秘密警察に追われた約6千名のユダヤ人がビザを求めて、7月27日にリトアニアの日本領事館に殺到しました。このとき、杉原千畝領事代理は日本の外務省の指示に反し、7月29日からユダヤ人に対してビザを書き続けます。この動きを制しようとソ連政府から、退去勧告が矢のようになされ、9月1日の朝、ついに帰国することになります。

杉原は列車から身を乗り出して、ビザを書き続けました。汽車が走り出し、書くことができなくなったとき、杉原は「許してください。私にはもう書けない。みなさんのご無事を祈っています」とホームに立つユダヤ人に深々と頭を下げました。「バンザイ、ニッポン」と誰かが叫びました。杉原のビザをもらったユダヤ人たちは、シベリア鉄道を利用してウラジオストックを経由して神戸に到着した人が多く、それからビザなしで入ることのできた上海に移動しました。

杉原領事は、後に、ユダヤ人を助けた理由を聞かれたとき「私は外務省に仕える役人であっただけでなく、天皇陛下に仕える一臣民であっただけからです。悲鳴をあげるユダヤ難民の前で私が考えたことは、もしここに天皇陛下がいらっしゃったらどうなさるか、ということでした。陛下は目の前のユダヤ人を見殺しになさるだろうか、それ



杉原千畝

とも恩情をかけられるだろうか。そう考えると、結果がはっきりしていました。私のすべきことは、陛下がなさったであろうことをすることだけでした」と、答えています。

このように、ユダヤ難民を救済した人々の精神は、実に天皇陛下の大御心を思い、それを実践したといえるのです。